

接続表現サラバの“別れの挨拶語”化—「指示性の不明瞭化」と「場面展開機能の発達」—

The Conjunction “*Saraba*” Changing to the Word of Farewell Used When Parting —Demonstrative Feature Obscuring and Function Expansion of Scene Development—

川村祐斗

Kawamura Masato

摘要

This paper investigated the process of changing the conjunction *Saraba* which expressed resultative and hypothetical situation into a word of farewell used when parting. For the investigation we used two points of view, "demonstrative feature being obscure" and "having function of scene development". These are led by characteristic that the word of farewell *Saraba* has.

By the way, *Saraba* had a stage of the conjunction which didn't express resultative and hypothetical situation before it changed to the word of farewell. *Saraba* at the stage had "demonstrative feature which was obscure" and "the function of scene development".

At first, we classified *Saraba* in "demonstrative feature being clear" or "demonstrative feature being obscure", and investigated the history. As a result of the investigation, there were few examples of "demonstrative feature being obscure" in the Early Middle Period, they gradually increased after the first half of the Middle Period, and a large number of the examples were seen at the end of the Middle Period. Then, we investigated how examples which will, demand expression followed *Saraba* changed historically and how examples which *Saraba* followed interjections such as *Iza*, *Ide* changed historically. As a result of the investigation, proportion of the examples which will, demand expression followed *Saraba* more increased in the first half of the Middle Period, and proportion of the examples which *Saraba* followed interjections such as *Iza*, *Ide* increased in the latter half in the Middle Period. From the above, we think "the function of scene development" expanded from the first half of the Middle Period to the latter half of the Middle Period. Furthermore, *Saraba* often appeared at the head of utterance. It was also on the syntactic condition that "the function of scene development" expanded.

"The function of scene development" wasn't newly acquired after examples of "demonstrative feature being obscure" began to appear but originally provided *Saraba* with, and it came to the front in conjunction with "demonstrative feature obscuring". *Saraba* lexicalized to the 17th century. Considering that, it is probable that "demonstrative feature obscuring" and "the function expansion of scene development" became most prominent at the end of the Middle Period, because of temporal consistency.

キーワード： サラバ 接続表現 別れの挨拶語 指示性不明瞭 場面展開機能

Keywords : Saraba Conjunction The word of farewell Demonstrative feature
being obscure Function of scene development

1. はじめに

日本語の別れの挨拶語には「サ系指示詞＋条件表現」由来の表現がある。これらは順接仮定条件の接続表現から別れの挨拶語へ変化したものとされている。以下、この変化を“別れの挨拶語”化と呼ぶ。別れの挨拶語化については、近時になって個別形式の研究が行われるようになってきたが(倉持 2013、田島 2018、川村 2018)、未だ十全に把握されているとは言い難い。

川村(2018)は接続表現サラバの別れの挨拶語化について記述している。川村は別れの挨拶語サラバの特徴から、①「発話の直後にその場を離れる行動(以下「離行行動」)を伴うこと」、②「後件が明示されないこと(以下「後件不明示」)」という条件を設定し、その歴史的推移を観察している。その調査から、①「離行行動」の例が中世後期までは少なく近世以降増加すること、②「後件不明示」の例が中世後期までは少なく近世以降増加すること、①②両方の条件を満たす例の割合がそれまでの時代と比べて中世後期以降高くなることが明らかになっている。

ただし、①②の条件のみでサラバの別れの挨拶語化が説明できるわけではない。次例は①②の条件を満たし、一見別れの挨拶語サラバの例のように捉えられる。

- (1) (僧都)「まかり降りむこと、今日明日は障りはべる。月たちてのほどに、御消息を申させはべらん」と申したまふ。(薫)いと心もとなけれど、なほなほとうちつけに焦られんもさまあしければ、さらば、とて帰りましたまふ。(源氏物語、夢浮橋、11世紀初期、p.380)

しかし、(1)のサラバが必ずしも別れの挨拶語であるとは言えない。接続表現サラバは「指示詞サ＋動詞アリ未然形＋接続助詞バ」と分析できる。指示詞サを構成要素に含むことから、元来明瞭な指示対象を有していたと考える。明瞭な指示対象を持つサラバは別れの挨拶語であるとは言い難い。(1)のサラバもサが明瞭な指示対象(僧都の発話内容)を持つと解釈することができる。よって、(1)は①②の条件を満たすが、別れの挨拶語サラバとは断定できない。

①②のみを根拠としてサラバの変化過程について論じることは困難である。①②は別れの挨拶語サラバの認定に最低限必要な条件ではあるが、観察した例が順接仮定条件の接続表現である可能性を排除できない点で十分な条件とはまでは言えない。そこで本稿では、①②以外の条件を提示し、サラバの変化過程について記述することを目的とする。ただし、順接仮定条件の接続表現である可能性を排除できれば、必ず別れの挨拶語であると言えるわけではない。本稿では、順接仮定条件を表さず別れの挨拶語でもない過渡的な段階をサラバに認める(詳細は後述)。

2. 調査の観点

順接仮定条件を表す可能性を排除するにはどのような観点をを用いればよいか。接続表現サラ

バの順接仮定条件の機能は、指示詞サの指示機能、接続助詞バの接続機能による。これらの機能が喪失した、または不明瞭になった例を探せばよい。

そこで本稿ではサラバが別れの挨拶語として語彙化したことを示す形式として、オサラバとサラバに繫辞が後接した例に着目する。これらは 17 世紀後半から 18 世紀初期にかけて出現するようになる。(2) は田島 (2018) の挙例による。

(2) 嶋原の別も、吉原のおさらばといふ声も、同じ物うき朝 (諸艶大鑑、1684 年、田島 2018:11)

(3) もうお目にかゝりますまい。さらばでござんす。(曾根崎心中、1703 年、p.34)

語彙化した構成体は「内部要素の意味構造を喪失」(小柳 2016:382) するとされる。川村 (2018) も述べているが、オサラバや繫辞後接例はサラバの構成要素の持つ形態・統語的制約を離れ、語彙化したものと解釈できる。もとの内部要素である指示詞サ・接続助詞バの意味構造も喪失または不明瞭化していると考えてよい。よって、サラバは 17 世紀までに語彙化したと考えるⁱⁱ。

それではサラバは 17 世紀までにどのような変化過程を辿るのか。用例を観察すると、別れの挨拶語とも言い難く、順接仮定条件を表すとも言い難い例が存在することがわかる。

(4) 能登殿前に進んだ郎等を憎い奴哉と有って、海へざんぶと蹴入れ、実光をば左の脇に挟み、弟をば右の脇に挟み、一締め締めて、いざ然らば〔faraba〕己等死出の山の供せいと有って、生年二十六で遂に海に入らせられた。(天草版平家物語、1592 年、p.347)

(4) のサラバが別れの挨拶語でないことは明らかである。一方で、指示詞サの明瞭な指示対象が存在しない点、それに伴い前件・後件を順接仮定条件の関係で接続していない点で、順接仮定条件の接続表現サラバとも一線を画するⁱⁱⁱ。これは、サラバが「指示詞サ+動詞アリ未然形+接続助詞バ」と分析でき、それぞれの構成要素の機能が発揮されていた段階から、サラバが一語化し、構成要素がサラバという語の一部となって、もとの機能が失われた段階へと変化したものであろう。これは接続表現サラバが挨拶語化する過渡的な段階であると考えられる。このような例の存在から、観察した例が順接仮定条件を表さないとしても、それが必ず別れの挨拶語であるということにはならないのである。しかし、(4) のような例は指示・接続の機能が喪失または不明瞭化している点で別れの挨拶語サラバと共通する。そのため、接続表現サラバの挨拶語化の過程を記述する上で、その過渡的な段階 (順接仮定条件を表さない接続表現として一語化した段階) を認めておくことは重要である。

これを踏まえて、本稿で用いる観点について説明する。前述したように、接続表現サラバの構成要素サは元来明瞭な指示対象を有していたと考える。しかし、(2) ~ (4) ではサに明瞭な指示対象があるとは言い難い。サラバは変遷の過程でサの指示性を不明瞭化させたと考える。そこで本稿では指示詞サの指示性が明瞭か否かを調査する。ただし、別れの挨拶語サラバは指示性が皆無であるというわけではない。詳しくは後述する。

別れの挨拶語への過渡的な例は、順接仮定条件を表す代わりにどのような機能を有している

と言えるか。(4) のサラバはそれまでの状況を区切り、「海に入」という新たな状況を起こす契機として機能しているように思う。本稿では、このように状況を区切り、場を展開する機能を「場面展開機能」と呼ぶ。別れの挨拶語サラバも状況を区切り、立ち去ることで新たな場面を展開させるという点で場面展開機能を持つと言える^{iv}。サラバは変遷の過程で場面展開機能を発達させてきたと考える。本稿ではその発達過程を調査する。

以上から、本稿では次の2つの条件をもとにサラバの変遷過程を観察する。

i 「サラバの構成要素である指示詞サの指示性が不明瞭であること」

ii 「サラバが場面展開機能を有すること」

オサラバや繫辞後接例から i は別れの挨拶語サラバに必要な条件である。しかし、(4) のような例から、指示性が不明瞭であっても接続表現である可能性を排除できない点で、別れの挨拶語サラバの十分条件であるとは言えない。一方、指示性が不明瞭であれば順接仮定条件を表し得ないから、i は「その例が順接仮定条件の接続表現でないこと」の必要十分条件である。

ii は別れの挨拶語サラバの必要条件であるが、(4) から接続表現である可能性を排除できないため十分条件とは言えない。また、場面展開機能は順接仮定条件と同時に成立し得る。

(5) (商人)「(略) 具しておはして我らを養ひ給へ。舟はみな損じたれば、帰るべきやうなし」といへば、この女ども、「さらば、いざさせ給へ」といひて、前に立ちて導きて行く。(宇治拾遺物語、13世紀初期、p.217)

(5) ではサラバは明瞭な指示対象(商人の発話内容)を有し、それが後件と順接仮定条件の関係で接続されていると解釈できる。また、商人とのやりとりの後「前に立ちて導きて行く」と新たな場面へ展開している。このように場面展開機能は順接仮定条件と両立し得る。よって、ii は「その例が順接仮定条件の接続表現でないこと」の必要条件ではあるが、十分条件とまでは言えない。この点で i の条件とはレベルが異なる。しかし、別れの挨拶語サラバが場面展開機能を有していると考えられる以上、その変化過程を辿る1つの指標にはなり得ると考える。

次節以降、サラバが出現し始める中古から、サラバが別れの挨拶語として語彙化すると考えられる17世紀以前を中心に、発話の例を対象として調査する。

3. 指示性の不明瞭化

本節ではサラバの構成要素サが明瞭な指示対象を持つか否かという観点で、サラバを分類する^v。サが明瞭な指示対象を持つ例を「指示性明瞭」、明瞭な指示対象を持たない例を「指示性不明瞭」とする。後者には、指示対象となり得る言語的文脈も動作・様子も見出せない例(6)、直前の自身の発話文末が断定的表現の例(7)、サラバ直前の自身の発話が相手の発話内容を受ける例(8)など、順接仮定条件不成立の例が該当する。

(6) (入道)「あはれ、人間の宝には、子に過ぎたるものこそなかりけれ。(略)」とて、手を合せ喜びたまふ。義朝、心中に、「無慙の事かな。(略)」と思ひければ、涙のす

すむを、さらぬ体にもてなして、(義朝)「さらば、正清、御輿進らせよ」と宣へば(保元物語、13世紀初期、p.340)

(7) (道長)「明後日仏にいとよき日なり。さらば御堂かき払はせ、老法師の居所もかき払はせはべらん。(略)」(栄花物語、卷第十六、11世紀前期、p.236)

(8) (津の国)「(略)都へ御ざらば同道いたさう(播磨)「それは日本一の事で御ざる、いざさらば同道いたさう(虎明本狂言、かくすい、1642年写、p.31)

「指示性不明瞭」について付言する。別れの挨拶語サラバは一見指示性がないように思える。しかし、出会った人々が何らかの相互行為を交わした後でなければ別れの挨拶はできない。別れの挨拶語サラバには先行する相互行為が必ず存在するということである。順接仮定条件の接続表現サラバが文脈や動作を具体的に指示するのに対し、別れの挨拶語サラバやその過渡期例はそれまでの状況を一括し、漠然と指示すると考える。このように考えると、別れの挨拶語サラバは「指示性皆無」とは言い難く、「指示性不明瞭」と呼ぶのが適切である。次節以降、「指示性不明瞭」の挙例の中には、サラバに先行する行為があり一見指示性があるように思える例も見られるが、順接仮定条件が不成立の例は全て「指示性不明瞭」と判断する。

サラバの指示性の推移をまとめる(表1)。調査資料は表1に示す通りである^{vi}。

表1) サラバの指示性の推移

時期	作品	指示性 明瞭		指示性 不明瞭	
		用例数	計	用例数	計
中古	竹取物語	3	112		5
	平中物語	8			
	大和物語	2			
	蜻蛉日記	11			
	落窪物語	14			
	枕草子	11			
	源氏物語	51		1	
	和泉式部日記	1			
	紫式部日記	1			
	更級日記	1			
	栄花物語	8		4	
	讃岐典侍日記	1			
中世 前期	保元物語	11	60	4	14
	平治物語	7		1	
	宇治拾遺物語	34		6	
	建礼門院右京大夫集	1			
	十訓抄	1		1	
	とはずがたり	4		2	
	徒然草	2			
中世 後期	覚一本平家物語	50	109	8	62
	天草版平家物語	37		6	
	虎明本狂言	22		48	
計		281		81	

表1から、時代を通じて「指示性明瞭」の例が中心であることがわかる。先行する言語文脈を指示する例(9)(10)や直接知覚できる動作・様子を指示する例(11)などがある。

(9) 「和歌ひとつつつ仕うまつれ。さらば許さむ」(紫式部日記、11世紀初期、p.166)

(10) (果報者)「(略)是は何やらかひてあるが、なんぢはよみやうをならふたか(太郎冠者)「中／ならふてまいつた(果報者)「さらばようできかせい」(虎明本狂言、よろい、1642年写、p.66)

(11) (玄光)「(略)」とて、常居の方へ走り入りたれば、長田は逃げて失せにけり。「さらば、討ち死にせよや」とて(平治物語、13世紀初期、p.526)

「指示性不明瞭」の例は中古から僅かに見られる。(12)は中將が妹の尼君に琴の演奏を促す場面である。

- (12) (母尼) 「いで、その琴の琴弾きたまへ。横笛は、月にはいとをかしきものぞかし。いづら、くそたち、琴とりてまゐれ」と言ふに、それななりと推しはかりに聞けど、いかなる所に、かかる人、いかで籠りゐたらむ、定めなき世ぞ、これにつけてあはれなる。盤渉調をいとをかしう吹きて、(中将) 「いづら。さらば」とのたまふ。(源氏物語、手習、11世紀初期、p.319)

「それななり…あはれなる」は中将が母尼について、「どうしてこのような老婆が生き残っていてこんな所にこもり暮しているのだろう」(新編日本古典文学全集②p.319)と感じている記述である。サの指示対象であるとは言い難い。

池上(1947)は中古の指示詞サを含む表現について「一往その語源的な文字通りの意味が強い時期にあると見られる」、「源氏などの「さりとて、さらば」などやうの語もすべて十分の意味ありと見たい」(p.7)と述べる。「文字通りの意味」「十分の意味」とはサが「指示性明瞭」であることを示唆するのだろう。中古のサラバは「指示性明瞭」が多数であり(表1)、池上の言は概ね頷ける。一方、(12)のサラバは「指示性不明瞭」であり、池上の言の反例となる。

中世になると、「指示性不明瞭」が一定数見られるようになる。(13)は乙若が義朝に自分の首を斬るよう促す場面である。

- (13) (乙若) 「(略) 今生に思ひ置く事とは、母御前の御行く末なり。されども、後れ先立つ慣らひ、弓矢取る者の子供なれば、力及ばぬ事どもなり。さらば、はや、疾う疾う仕れ。(略)」とて (保元物語、13世紀初期、p.362)

(13)はサラバに先行する文が断定の助動詞ナリで終止する。自身が述べた断定的な内容を指示するならば確定条件の形式が続くのが自然であり、サラバの順接仮定条件はここでは成立しないと考える。仮定条件不成立という点でそれまでのサラバとは一線を画する^{vii}。

「指示性不明瞭」は中世末期、虎明本狂言に至ると「指示性明瞭」の用例数を上回る。

- (14) (太郎冠者) 「(略) 代物はどれで渡しませうぞ(売手)「三条の大極やでうけとりませう(太郎冠者)「それは私の知人でござる、さらばそれでわたしまらせう。(虎明本狂言、めぢかこめばね、1642年写、p.90)

(14)はサラバに先行する発話が前の相手の発言を受けており、「指示性不明瞭」と判断できる。仮定条件では解釈しづらい点、(13)と同様、順接仮定条件のサラバとは異質である。

(13)(14)は前件を仮定した場合に後件としてどのようなことが起こるのかを述べるというよりも、自身や相手の発言を受けて、それを仮定することなく、次の行為((13)ならば相手の行為、(14)ならば自身の行為)を提示することに主眼が置かれているように思う。

以上、サラバの構成要素である指示詞サの指示性が明瞭か否かを観察した。調査の結果、中古で僅かであった「指示性不明瞭」の例は、中世前期以降一定数見られるようになり、中世末期(虎明本狂言)に至ってまとまって見られるようになることがわかった。

4. 場面展開機能の発達

4. 1 具体的指標の設定

場面展開機能の発達を論じるに当たり、先行研究を確認しておく。清瀬(1955)、小林(1983)は中世末期のサラバについて記述する。清瀬(1955)は、天草版平家物語のサラバは「接合よりも転換の役割を演じ」(pp.192-193)、また、「誘いかけ、うながし、手をさしのべる心意」(p.197)があり、「相手の注意を喚起し、行動をうながすきっかけ」(p.197)となると述べる。小林(1983)は、狂言台本のサラバには「現代語の「ソレデハ」「デハ」にあたる、場面的に転換する一つの契機を示す」(p.15)用法があり、これを「契機的用法」と称する。以上から中世末期のサラバは場面展開機能に相当する用法を持っていたことが窺える。しかし、これらは具体的指標に基づく記述ではない。また、中世末期の様相を記述するものであり発達の過程が把握できない。

そこで本稿では、後続する意志・命令表現、イザ・イデなどの感動詞(以下「イザ類」という)具体的指標を設定する。別れの挨拶語サラバは後続表現や前接要素が必須ではないため、意志・命令表現やイザ類は別れの挨拶語化の過程を辿る直接的な指標とは言い難い。この点は、別れの挨拶語サラバの必要条件である「指示性不明瞭」とは一線を画する。しかし、別れの挨拶語サラバの場面展開機能の発達過程を辿るには、判断基準となる具体的指標が必要となる。意志・命令表現やイザ類は場面を展開することを明示的に示す表現であり、これらと共に起るサラバに着目することで、場面展開機能の発達過程を調査し得ると考える。

4. 2 意志・命令表現との共起

意志・命令表現はサラバの後続表現の中でも、場面が展開することを明示的に表す表現であると考えられる。それは、疑問・推量・推定表現などが事態に対する話者の認識を表すのに対し、意志・命令表現は行為の実行に関わる意味を表すからである。自ら行為を実行したり相手に行為を実行させたりすることは場面展開の契機となり得る。よって、場面展開の際には意志・命令表現が多く使用されることが予想される。前節(13)(14)がその一例である。以上から、意志・命令表現はサラバの場面展開機能発達の過程を辿る指標として有効であると考えられる。

ここでサラバの後続表現に関する研究について触れておく。楊(2016)は中古から院政鎌倉期のサラバの後続表現を意志・命令・疑問・推定表現に分類する^{viii}。楊によれば、中古和文のサラバの後続表現は「疑問表現が続く例がやや少なく、意志表現、命令表現、推定表現が続く例が幅広く見られ」(p.77) するという(285例中意志 97例 34.0%、命令 96例 33.7%、疑問 26例 9.1%、推定 66例 23.2%)。院政鎌倉期になると「和文調の強い作品では、「さらば」の用法が大きく偏るようになり、意志表現と命令表現が続く例が中心とな」(p.77) するという(201例中意志 61例 29.9%、命令 110例 54.7%、疑問 15例 7.5%、推定 15例 7.5%)。また、小林(1983)は虎明本狂言と虎寛本狂言における接続表現の後続表現を、推量・意志(意向・勧誘)・希望・命令・疑問・断定・平叙に分類する^{ix}。それによれば、虎明本狂言におけるサラバの後続表現

349 例中意志 178 例 51.0%、命令 155 例 44.4%と偏向していることがわかる。

以上、先行研究によれば、中古におけるサラバの後続表現は意志・命令・推定表現など幅広い後続表現を取るが、中世以降、和文調の強い作品や狂言本などを中心に意志・命令表現に偏向することがわかった。ただし、楊（2016）・小林（1983）の調査では、虎明本狂言を除き中世後期（室町時代）頃の様相が不明である。また、楊では次のような完了表現がどのように分類されるのかなどが記されておらず、分類方法についても検討が必要である。

(15) 「さらばうけたまはりぬ。(略)」と聞こゆ。(源氏物語、東屋、11 世紀初期、p.87)

以上を踏まえ、サラバの後続表現について調査した(表 2)。調査した資料は表 2 に示す通りである。表 2 から、時代を通じて意志・命令表現がサラバの後続表現の多くを占めることがわかる。中古に比べ中世の方が意志・命令表現を後続表現に取る割合がやや高くなっている。

表 2) サラバの後続表現の推移

時代	作品名	意志	命令	疑問	推量	推定	断定	完了	願望	打消	その他	省略	計	意志・命令率
中古	竹取物語	3											3	100%
	大和物語	1											1	100%
	平中物語	4	1	1		1							7	57.1%
	蜻蛉日記	1	5		1							4	11	54.5%
	落窪物語	4	5	1	1		1					1	13	69.2%
	枕草子	2	5	1	2							1	11	63.6%
	源氏物語	8	14		7	8		1	1			15	54	40.7%
	和泉式部日記	1											1	100%
	紫式部日記	1											1	100%
	堤中納言物語	2	3									5	10	50.0%
	大鏡	1	2		1	1	1						6	50.0%
	讃岐典侍日記											2	2	0.0%
中世前期	宇治拾遺物語	14	19		2		2					1	38	86.8%
	建礼門院右京大夫集			1									1	0.0%
	十訓抄	1	2	1									4	75.0%
	とはずがたり		1	1								3	5	20.0%
	徒然草		2										2	100%
中世後期	覚一本平家物語	9	29	5	1			1		1	1	2	49	77.6%
	天草版平家物語	10	19	4			2				1		36	80.6%
	エソボのハブラス	3	4										7	100%
	虎明本狂言	30	20				5		2				57	87.7%
計		95	131	15	15	10	11	2	3	1	2	34	319	

中古は作品による差も見られるが、意志・命令表現が概ね 5～6 割程度で推移する。

(16) 「和歌ひとつづつ仕うまつれ。さらば許さむ」(紫式部日記、11 世紀初期、p.166、再掲 (9)) 意志表現

(17) (薫)「いでさらば、伝へはてさせたまへかし。(略)」とのたまひても(源氏物語、東屋、11 世紀初期、p.53) 命令表現

また、楊（2016）が述べるように、中古のサラバは意志・命令表現以外にも疑問・推量・推定表現など幅広い後続表現を取る。

(18) 「夜ふけにければ、局もなくてなむ、よるべもなくてある」といへば、「さらば、ここにやは宿りたまはぬ」(平中物語、10 世紀半ば、p.465) 疑問表現

(19) 「夜数にはしもせじとす」と忍びやかに言ふを聞き、「さらば、いとかひなからむ」。

- 異夜はありと、かならず今宵は」とあり。(蜻蛉日記、10世紀後半、p.292) **推量表現**
 (20) (左馬頭は女と口論の末、指を噛まれる。)(左馬頭)『かかる傷さへつきぬれば、い
 よいよまじらひをすべきにもあらず。辱めたまふめる官位、いとどしく何につけてか
 は人めかむ。世を背きぬべき身なめり』など言ひおどして、(左馬頭)『さらば、今日
 こそは限りなめれ』と、(源氏物語、帚木、11世紀初期、p.74) **推定表現**

中世前期以降になると、中古同様作品による差は見られるものの、意志・命令表現が全体の概ね7割以上を占めるようになる。中古では意志・命令表現以外にも幅広い後続表現を取っていたが、中世になると後続表現が意志・命令表現に比較的偏向するようになっていく。

- (21) (商人)「(略) 具しておはして我らを養ひ給へ。舟はみな損じたれば、帰るべきやうなし」といへば、この女ども、「さらば、いざさせ給へ」といひて、前に立ちて導き
 て行く。(宇治拾遺物語、13世紀初期、p.217、再掲(5)) **命令表現**
 (22) (太郎冠者)「(略) 代物はどれで渡しませうぞ(売手)「三条の大極やでうけとり
 まらせう(太郎冠者)「それは私の知人でござる、さらばそれでわたしまらせう」(虎
 明本、めぢかこめぼね、1642年写、p.90、再掲(14)) **意志表現**

以上、サラバの後続表現を調査した。結果、意志・命令表現と共に起るサラバの例は中古から高い割合を占めるが、中世前期以降その割合がより高くなることがわかった。

4. 3 イザ類との共起

本節では場面展開機能の発達過程を辿る指標としてイザ類(イザ・イデなど)に着目する。イザ類とサラバの共起例を「イザサラバ類」と称する。イザ類は意志・命令表現との共起が多いことから場面展開機能を有していると考えられる。これらは古代から用例が観察できる。

- (23) 夕星の夕になればいざ寝よと〔伊射祢余登〕(万葉集、巻五 904、8世紀後半、p.93)
命令表現

- (24) 夜中ばかりに、廊に出でて人呼べば、「下るるか。いで、送らむ」とのたまへば(枕
 草子、11世紀初期、p.447) **意志表現**

『日葡辞書』『日本大文典』により中世末期のイザ類・イザサラバ類の様相を確認する。

- (25) IZa. イザ(いざ) 勧誘の感動詞。すなわち、‘さあ’。例、Iza ite qico. (いざ行て聞かう)(略)(日葡辞書、1603年、p.353)
 (26) Ide. イデ(いで) 感動詞。さあ、あるいは、さて。例、ide mono mixo (いでもの見せう)(略)(同、p.331)
 (27) Izasaraba. イザサラバ(いざさらば) では、さあ。勧誘の感動詞。(同、p.353)
 (28) 慇懃○De(で)。Ideide(い^でい^で)。Sa(さ)。例へば、Sa yomo(さあ読まう)。} 単数に用ゐる。Ideide(い^でい^で)。Iza(い^ざ)。Izaya(い^ざや)。Iza saraba(い^ざさらば)。} 複数と単数に用ゐる。(ロドリゲス日本大文典、1604年、p.293)

中世末期のイザサラバ類は勧誘などの意を表す形式として、イザ類と同類のものとして捉えられていたことが窺い知れる。

小林(1983)は虎明本狂言のイザサラバを「契機的用法であることを明示するもの」(p.267)とする。前述したように「契機的用法」とは場面展開機能に相当する用法であると考えられるから、中世末期のイザサラバはイザ類と同様、場面展開機能を有していたものと推測できる。

サラバが場面展開機能を持つかどうかを意味分析のみで判断するのは困難である。それに対して、イザ類という形式的な指標を用いることは、場面展開機能の発達過程を客観的に示すものとして有効であると考ええる。

以上を踏まえ、イザサラバ類の推移を見る。調査資料は『新編日本古典文学全集』所収作品(中古・中世)及び、覚一本平家物語、天草版平家物語、エソポのハブラス、虎明本狂言(脇狂言之類)における発話の例である。そのうちイザサラバ類が観察できた作品を表3に示した。

表3) イザサラバ類の推移

時代	作品	イザ サラバ	計	イデ サラバ	計
中古	源氏物語			1	1
中世前期	平治物語	1	1		
中世後期	覚一本平家物語	1	32	4	19
	太平記	4		6	
	ものくさ太郎			1	
	謡曲集	4		5	
	天草版平家物語	3			
	エソポのハブラス	2			
	虎明本狂言	18		3	

表3から、中古・中世前期のイザサラバ類は次の2例のみであることがわかる^{xi}。

(29) (薫)「いでさらば、伝へはてさせたまへかし。(略)」とのたまひても(源氏物語、東屋、11世紀初期、p.53、再掲(17))

(30) (玄光)「いざ、さらば、長田め、討たん」とて、常居の方へ走り入りたれば(平治物

語、13世紀初期、p.526)

中世後期にはイザサラバ類がまとまって見られるようになる。

(31) (孫一)「がてんがいたほどに、いざさらばお供申ていかう(孫二)「いそいでつれまらしてまいらふ(孫一)「いざさらばござれ(虎明本狂言、やくすい、1642年写、p.108)

(32) 文覚は「(略) いでさらばふみをやらう」どいひければ(覚一本平家物語、巻第五、1371年頃、p.361)

サラバもイザ類も中古に既に存在するにもかかわらず、イザサラバ類が中世後期まで顕著に見出せないのはなぜか。4. 2で述べたように、中古のサラバは意志・命令表現が一定の割合を占めるものの、その他幅広い後続表現を取る。一方、中世前期以降意志・命令表現の割合がより高くなる。これをサラバの場面展開機能の発達と考えると、中世後期のイザサラバ類の増加も理解しやすい。つまり、イザサラバ類はサラバの場面展開機能がこの期に最も顕著になったことの表れとして、場面展開機能を担う形式同士が選好する環境(意志・命令表現)に共起して生まれたものと考えられる^{xii}。イザサラバ類の少ない中世前期までは、サラバがイザ類と共起するのに十分なほど場面展開機能が発達していない段階であると考えられる^{xiii}。

以上、意志・命令表現とサラバの共起例が中世前期以降増加し、イザサラバ類が中世後期に

最も顕著になることから、場面展開機能は中世前期から中世後期にかけて発達したと考える。

4. 4 指示性の不明瞭化との関係と統語的条件

接続表現サラバはもともと順接仮定条件を表す。これは「未然形+バ」という構造と指示詞サの指示機能、接続助詞バの接続機能に支えられた特徴であり、いずれの要素が欠けても成立しない。本稿の調査から、接続表現サラバのサの指示性は中世以降不明瞭化していくことがわかった。これは順接仮定条件成立の要件が満たされなくなっていくことを意味する。

サラバは指示性が不明瞭になりながらも、その形式自体は維持され続ける。これはサラバが場面展開機能を担い得る形式であった結果であろう。指示性不明瞭 81 例（表 1）の後続表現は意志表現 36 例、命令表現 31 例、疑問表現 1 例、推量表現 1 例、省略形 12 例である。省略形も意志・命令表現の省略と思しい例が大半である。このように意志・命令表現に偏ることから、指示性の不明瞭化と場面展開機能の発達は連動していると考えられる。

ただし、指示性が不明瞭化するようになってから場面展開機能を新たに獲得したわけではない。2. で述べたように順接仮定条件と場面展開機能は両立し得る。それが証拠に、サラバには明瞭な指示対象があり、かつ意志・命令表現を後続に取るものが存在する。

(33) (商人)「(略) 具しておはして我らを養ひ給へ。舟はみな損じたれば、帰るべきやうなし」といへば、この女ども、「さらば、いざさせ給へ」といひて、前に立ちて導きて行く。(宇治拾遺物語、13 世紀初期、p.217、再掲 (5))

(34) (内侍)「仰せごとに (略) よく見て参るべきよし、のたまはせつるになむ、参りつゝ」といへば、(姫)「さらば、かく申しはべらむ」といひて、入りぬ。(竹取物語、10 世紀初期、p.57)

場面展開機能はサラバがもともと有していた機能である。指示性が不明瞭化し順接仮定条件が不成立となったサラバは、場面展開機能を表面化させる形で維持し続けたものと考えられる。これこそが、(4) のように一語化した、別れの挨拶語への過渡的な段階であろう。

ここで指示詞の歴史的変化とサラバの関わりについて考えたい。岡崎 (2010) は指示副詞について「中世後期を転換期として、カク・サからコ・ソ・アへと」(p.84) 変化すると述べる。構成要素にサを含む接続表現サラバも、この変化に伴ってソを含む形式に置き換わり、次第に衰退していくことが予想される。しかし、中世後期では「指示性不明瞭」のサラバは維持され、17 世紀までに別れの挨拶語として語彙化する。サラバは指示詞の歴史的変化とは離れたところで独自に変化したということになる^{xiv}。前述の通り、サラバは順接仮定条件という指示詞サの機能に支えられた接続表現から、場面展開機能を中心とする、一語化した接続表現へと変化していたと考える。一語化したサラバでは、指示詞サは語の一部となってもとの機能を失っていたため、指示詞の歴史的変化の影響を受けなかったのだろう。

場面展開機能発達の理由として、サラバと意志・命令表現との共起例が中古から一定数見ら

れることの他、サラバの発話冒頭での使用が多いことを挙げる。表 1 の資料で調査すると 362 例中 186 例 51.4% が発話冒頭に位置していた。小野寺 (2014) は発話冒頭及び発話末という位置について「会話の中で、話者達がさまざまな会話運営上の意図、(略)「話題を換える」「会話を始める」などの行為を、いろいろな語用論的要素で表す場所」(p.16) とする。特に発話冒頭は「会話の中で、これから起こる行為を知らせる」(p.20) 場所であると位置づける。サラバが、コミュニケーションの開始を図り、後に場の状況が展開することを示す標識として機能するようになったのは、発話冒頭に多く出現するという統語的条件にもよると考える。

5. おわりに

本稿では i 「サラバの構成要素である指示詞サの指示性が不明瞭であること」、ii 「サラバが場面展開機能を有すること」という観点から接続表現サラバの別れの挨拶語化の過程を調査した。結果、中古で僅かだった「指示性不明瞭」の例は中世以降徐々に増加し、中世末期にまとまって見出せることがわかった。また、意志・命令表現との共起例の割合が中世前期以降より高まり、イザ類との共起例が中世後期にまとまって見られることから、場面展開機能は中世前期から中世後期にかけて発達したことがわかった。場面展開機能はサラバの指示性不明瞭化の結果として表面化したと考える。サラバが 17 世紀までに別れの挨拶語として語彙化することを考えると、指示性の不明瞭化及び場面展開機能の発達が中世末期に最も顕著になるのは、時期的な整合性も取れており蓋然性が高い。また、場面展開機能発達の背景にはサラバが発話冒頭によく出現するという統語的条件も関わると考える。

川村 (2018) の観点と本稿の観点を併せてサラバの変化過程まとめると次のようになる。中世前期から中世後期に場面展開機能が発達し、次いで中世末期に指示詞サの指示性が不明瞭化した例がまとまって見られるようになる (順接仮定条件を表さない接続表現サラバの確立、サラバの一語化)。近世前期には「離行行動」「後件不明示」の例が増加し、17 世紀後半から 18 世紀初期にかけてオサラバや繫辞後接例が見られるようになる (別れの挨拶語サラバの確立)。以上が具体的指標をもとにしたサラバの別れの挨拶語化の過程である。

本稿の調査結果はサラバの変化過程を把握するものである一方、「未然形+バ」条件節の質的变化がサラバの現象面に表れた結果であるとも考えられる。たとえば、4. 2 でサラバの後続に意志・命令表現が多いことを述べたが、そもそも「未然形+バ」条件節の後続に意志・命令表現が多いという可能性も考えられる。その場合サラバの後続に意志・命令表現が多用されるのは、サラバの特徴ではなく「未然形+バ」条件節の特徴の反映ということになる^{xv}。このように、サラバの変化過程における現象は、サラバの変化なのか「未然形+バ」条件節の質的变化の反映なのか曖昧である。これを解明するにはサラバと「未然形+バ」条件節とを比較する必要がある。本稿では具体的指標をもとにサラバの変化過程の一側面を記述するに留め、条件表現史におけるサラバの位置づけについては別稿で検討する。

i 挙例に際して、読解の便宜から私に括弧等で内容を補足した箇所がある。また、用例における下線・記号（「 」、「 」、「 」、「 」など）は、断りのない限り筆者が付したものである。

ii 『日葡辞書』のサラバの説明には別れの挨拶語に相当する意の記載がある。このことから、サラバが 17 世紀までに別れの挨拶語として語彙化したことが窺える。用例は邦訳による。

イ) Saraba.サラバ（さらば）では、平安でいらっしやい、または、では、無事にお出でなさい〔御機嫌よう、さようなら〕.¶ また、さあ、しっかり.¶ また、そうであるからには。（日葡辞書、1603 年、p.558）

iii 順接仮定条件の接続表現サラバは、構成要素であるサの指示対象が「前件」、サラバに後続する主節述語句が「後件」となる。「明瞭な指示対象がないこと」は「前件が不明瞭であること」と同義であり、指示対象が不明瞭であることに伴って、前件と後件を順接仮定条件の関係で接続する機能は成立しなくなる。

iv 水谷（1982）も「別れの言語行動は、それまでの行動への区切りを示す役割」（p.23）を担い、「その後の行動への働きかけの機能を持つと考えるべきではないか」（p.23）と述べる。倉持（2013）も別れの挨拶語に「時を区切る機能」（p.46）があると述べる。

v 次のように、状況が詳細に描かれず、指示対象が特定不能の例は調査対象から除外する。

ロ) むかし、つれなき人をいかでと思ひわたりければ、あはれと思ひけむ、（つれなき人）「さらば、あす、ものごしにても」といへりけるを（伊勢物語、10 世紀半ば、p.194）

vi 「虎明本狂言」は「脇狂言之類」のみの集計である。表 2 以降も同様。

vii (13) は、サラバが「弓矢取る者の子供なれば、力及ばぬ事どもなり」という一般論を仮定している、という見方もできる。その場合サは前件の一般論を指示し、順接仮定条件が成立することになる。ただし、(13) が順接仮定条件として解釈できるとしても、一般論によって自身の個別具体的な状況について断定的に述べる表現法そのものはレトリカルであり、本稿の趣旨に大きく影響するものではないと考える。

viii 楊（2016）はサラバの後件が言いさし文の場合「前後の文脈によって後続文の意味合いを推測」（p.68）する。「熟合した慣用句「さらばとて」と、別れの挨拶語「さらば」とは、考察対象外と」（p.68）する（何を以って「別れの挨拶語」と見なすのかは説明されていない）。「意志表現」は「「さらば」に含意される前提条件を受けて、その条件のもとに、自分の行為について意志を表明するもの」（p.69）を指す。「命令表現」は「「さらば」によって前述の事柄を受けて、その条件のもとに、命令を下すもの」（p.69）であり、「相手の行動に対して、適当・勧誘的に言う場合も軽い命令として」（p.69）いる。「疑問表現」は「「さらば」で受ける前提条件のもとに、話し手の疑問を提示する例」（p.69）であり、「反語的、詰問的な用法」（p.69）も含む。

「推定表現」は「前提条件を根拠とした強い推測や断定の意に使う」(p.70)としている。

ix 小林(1983)は意志(意向・勧誘)表現をウ、ウカ、ウズ(ル)、マイ、マイカ、ベシ、〔意向〕に、命令表現を〔命令・依頼〕〔禁止〕に分類する。

x 後件が続かない例(ハ)は調査対象外とする。表2における「打消」とは「先行の事柄に対し、後続の事柄が反対・対立の関係にあることを示す(逆接の確定条件)」(日本国語大辞典)と説明される例(ニ)を指し、打消意志ジなどは含まない。「その他」は後件に「物を」という表現が来る例(ホ)、「省略」は後件の述語句末が途中で省略されている例(ヘ)を指す。

ハ)「なほ舟にてを」とあれば、さらばとて、みな乗りて、(蜻蛉日記、10世紀後半、p.261)

ニ)「(略)されば那智の奥にて身をなげてましますごさんなれ。さらばひきぐして一所にも沈み給は^で、ところ^ノにふさん事こそかなしけれ。(略)」ととひ給へば、(覚一本平家物語、巻第十、1371年頃、p.285)

ホ)梶原この言葉に腹が居て、妬う然ば〔faraba〕梶原も盗まう事で有った^{物を}とどっと笑うて退いたと申す。(天草版平家物語、1592年、p.233)

ヘ)「誰がともなくて、さし置かせて来たまへよ。さて、今日のありさまの見せたまへよ。さらばまたまたも」と言へば、(堤中納言物語、11世紀半ば、p.453)

xi 発話以外では手紙の例が1例見られた。

ト)御返りに、いざ、さらば渡らむ。ゆゆしげなる人は。などぞ聞こえたまひける(宇津保物語、国譲上、10世紀後半、p.22)

xii 表3の例の後続表現を調査するとイザサラバ33例中意志表現25例、命令表現7例、省略形1例、イデサラバ20例中意志表現15例、命令表現2例、疑問表現2例、省略形1例であった。イザサラバ類は概ね意志・命令表現と共起することがわかる。

xiii 査読者の方から、イザ類に場面展開機能が備わっているのなら、イザサラバ類も場面展開機能はイザ類の部分が担っており、サラバ自体に場面展開機能が備わっているとは言えないのではないかと、というご指摘を頂いた。しかし、仮にそうであるとすると中古の段階からイザサラバ類が一定数見られても良いはずである。ところが実際は、中世後期にならなければ一定数見られるようにはならない。このことからやはり、中世前期以降サラバ自体が場面展開機能を担う例が増加し始め、中世後期にそれが最も顕著になったというように考えたい。

xiv ただし、近世中期頃までには接続表現サラバは衰退し、ソレナラバなどに交替するようである。小林(1983)では、虎明本狂言(1642年写)におけるサラバ多用から虎寛本狂言(1792年写)におけるソレナラバ多用へという交替の様子が報告されている。

xv 山口(1980)は「可能性の表現形式である仮定の条件形式は、後句の帰結に主体の推量・意志・命令・反語などの志向を導く傾向が強い」(p.92)と述べているが、どの表現がどのくらいの割合で仮定条件句の後続に出現するかまでは示していない。

〈使用テキスト・コーパス〉 一部、記号で示す。○…国立国語研究所（2019）『日本語歴史コーパス』（バージョン 2019.3、中納言バージョン 2.4.2）、△…『新編日本古典文学全集』小学館／上代：万葉集…△／中古：竹取物語、伊勢物語、平中物語、大和物語、蜻蛉日記、落窪物語、枕草子、源氏物語、和泉式部日記、紫式部日記、堤中納言物語、更級日記、大鏡、讃岐典侍日記…○、栄花物語、宇津保物語…△／中世前期：保元物語、平治物語…△、宇治拾遺物語、建礼門院右京大夫集、十訓抄、とはずがたり、徒然草…○／中世後期：太平記、ものくさ太郎、謡曲集…△、覚一本平家物語…『日本古典文学大系』岩波書店、天草版平家物語、エソポのハブラス、虎明本狂言…○、日葡辞書…土井忠生・森田武・長南実編（1990）『邦訳日葡辞書』岩波書店、ロドリゲス日本大文典…土井忠生訳（1955）『日本大文典』三省堂／近世：曾根崎心中…△

〈使用ウェブサイト・データベース〉 株式会社ネットアドバンス「ジャパンナレッジ Lib」最終閲覧 2019 年 7 月 6 日（<https://japanknowledge-com>）／国立国語研究所「コーパス検索アプリケーション『中納言』」最終閲覧 2019 年 9 月 25 日（<https://chunagon.ninjal.ac.jp>）／国文学研究資料館「日本古典文学大系本文データベース」最終閲覧 2019 年 7 月 8 日（<http://base1.nijl.ac.jp/~nkbthdb/>）

〈引用・参考文献〉 池上禎造（1947）「中古文と接続詞」『国語国文』15-12 京都大学文学部国語国文学研究室 pp.1-9.／岡崎友子（2010）『日本語指示詞の歴史的研究』ひつじ書房.／小野寺典子（2014）「談話標識の文法化をめぐる議論と「周辺部」という考え方」金水敏・高田博行・椎名美智編『歴史語用論の世界 文法化・待遇表現・発話行為』ひつじ書房 pp.3-27.／川村祐斗（2018）「サラバの別れの挨拶語化に関する記述的研究」『名古屋大学国語国文学』111 名古屋大学国語国文学会 pp.70-56（(33）-（47））.／清瀬良一（1955）「天草本平家物語の接続表現「さらば」などの場合について」『広島大学文学部紀要』8 広島大学 pp.188-212.／倉持益子（2013）「別れの言葉に見る日本語あいさつの特徴」言語と交流研究会編『言語と交流』16 凡人社 pp.44-55.／小林賢次（1983）「狂言台本における仮定条件の接続詞「サラバ」から「ソレナラバ」へ」国語学会編『国語学』132 武蔵野書院 pp.11-27.／小柳智一（2016）「語彙 - 文法変化 内容語生産と機能語生産」藤田耕司・西村義樹編『日英対照 文法と語彙への統語的アプローチ 生成文法・認知言語学と日本語学』開拓社 pp.380-400.／田島優（2018）「さようなら考—その成立と別れの挨拶表現のシステム変化—」『東海学園 言語・文学・文化』17 東海学園大学日本文化学会 pp.8-18.／日本国語大辞典第二版編集委員会（2000-2002）『日本国語大辞典』（第二版）小学館.／水谷修（1982）「「別れのことば」総論 別れの言語行動」『言語生活』363 筑摩書房 pp.18-24.／山口堯二（1980）『古代接続法の研究』明治書院.／楊瓊（2016）「接続詞「しからば」と「さらば」について 文体による用法差を中心に」『同志社日本語研究』

20 同志社大学大学院日本語研究会 pp.67-79.

〔付記〕 本稿は日本語学会 2018 年度秋季大会において発表した内容に修正を加えたものである。発表に際してご意見・ご指導を賜った方々に御礼申し上げる。